

『イヴォンヌ・レイナーを巡るパフォーマティヴ・エクシビジョン』

2017年10月11日（水）～15日（日）12:00～18:00

イヴォンヌ・レイナーは、アメリカを代表する振付家・ダンサー・映画監督の一人で、ニューヨーク・ジャドソン教会派のメンバーとしてポストモダンダンスの歴史を作り、コンテンポラリーダンス界においても大きな影響力を持っています。イヴォンヌ・レイナーは作家として振付・ダンス・映像という複数のメディアの狭間を移動しながら、二〇〇〇年代からは、ダンスにおける「老い」を実験的テーマとするダンス作品を創り続けています。二〇一六年度から継続する研究プロジェクト「老いを巡るダンスドラマトゥルギー」では、この度、レイナー作品を中心としたアーカイヴ資料、映像上映、『Trio A』と『Chair/Pillow』のワークショップ・ショーイング、『Trio A』が含まれていた1968年の作品『The Mind is a Muscle』（心は筋肉である）の舞台再構成、レクチャーからなるパフォーマティヴ・エクシビジョンを、京都芸術劇場春秋座の空間で開催します。これはまた、日本演劇の歴史を体現する春秋座を美術館として用いる、ダンスの継続展示上演という試みです。

近年、各国のダンスシーンで老いの問題に注目が集まっているのは、1960年代に活躍したレイナーらのポストモダンダンスのアーティストが、高齢になってもなおダンス作品を作り続けていることに、一因があります。このようなダンサーの老いのテーマと共に、歴史的な意義を持つダンス作品をどう残し、再構成するかというダンスアーカイヴやり・エンアクトメントの議論も活発化しています。こうしたダンス作品とダンサーの老いを探る試みは、また、劇場と美術館の機能を、踊る身体の側面から検討することと捉えられます。

踊る身体をホワイトキューブという純粋空間に管理し、アーカイヴし永遠にコレクション化するのが美術館的発想であるとすれば、劇場的思考は、踊る身体を場の時間枠で蘇生させます。したがって、美術館に所蔵される有形文化財を、劇場に取りこむことは、展示されたオブジェに命が吹き込まれ、老いる時間が与えられることになるのでしょうか。加えて、そこに展示されるものが、かつてその時間を生きたオーラルヒストリーや映像作品、今この時間を生き、この先に伝えられていくダンスである場合、展示作品の持つ永遠性と、ひとつの空間と時間枠で蘇り老いていくダンスの時間性とは、同時に生成するのでしょうか。

ダンスの理論化を成し遂げた数少ない振付家の一人であるレイナーは、日本での紹介は少ないながらも、ダンスする身体について、私たちに多くの示唆を投げかけています。レイナー作品を巡るポストモダンダンスのアーカイヴを、日本の伝統芸能での無形の文化財が生きる春秋座に位置付けたとき、この芝居小屋の力によって、ポストモダンダンスに、老いの新たな美意識と息吹が与えられるのでしょうか。

主催：京都造形芸術大学<舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点> 2017年度 共同研究プロジェクト「老いを巡るダンスドラマトゥルギー」 研究代表者 中島那奈子

協力：KYOTO EXPERIMENT 京都造形芸術大学<舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点> 2017年度研究プロジェクト「『ダンス 2.0』の環境構築を通して今日的教育という課題へとダンスをつなぐ試み」 研究代表者：木村覚（"Trio A" ショーイング）

資料提供：Post Studium / urizen

共同利用・共同研究拠点 「舞台芸術の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」は、京都造形芸術大学・舞台芸術研究センターが母体となり、文部科学省「共同利用共同研究拠点」の認定を受けて2013年度に設置された研究拠点です。www.k-pac.org/kyoten/



『イヴォンヌ・レイナーを巡るパフォーマティヴ・エクシビジョン』 ウェブサイト www.k-pac.org/kyoten/guide/20171011yvonne/